益田市は、東京 2020 パラリンピックでのアイルランドサイクリングチームの事前キャンプ受入れを契機にアイルランドとの交流を進めています。スペシャルコラム『アイルランドからきたピーターさん』では、アイルランド出身で益田市ともご縁のあるピーター・J・マクミランさんのコラムを全４回にわたってお届けします。

スペシャルコラム

アイルランドからきたピーターさん

Part. 1

2020年12月、母が逝去した。その知らせを聞いた夜、私は大好きな島根県にいた。国の起こりとの縁があり、神在月には八百万の神々が集うとされ、そして千年を超える歴史を持つ神社や、美しい海岸と山並みと農村の風景、さらには旅の疲れを癒す温泉もある県である。

その翌日には山本浩章益田市長を表敬訪問する予定であった。益田市は、昨年の東京パラリンピックでコロナ禍の中、アイルランド自転車チームのキャンプを受け入れ、メダル獲得に貢献してくれた。私が現在研究を進めている万葉集ともゆかりが深い。しかし、母の葬儀に参列するため、急ぎ帰国することとなり、市長との面会はかなわなかった。後日、山本市長から思いやりに満ちた手紙を受け取った。市長ご自身もその年の５月に母上を亡くされたばかりだった。

それから１年余りが経ち、私はようやく益田市を訪れることができた。万葉集を代表する歌人である柿本人麿は当地を何度も訪れ、多くの歌を詠んでいる。益田市は現在もこの歌聖を大切にしている。

市長との面会をいささか緊張して迎えた私は、すぐに良い友人を得たことに感激した。なんと、彼は私の著書をすべて読んでいて、永年にわたる翻訳の変遷をほかの誰よりも熟知していた。もしかすると、著者である私以上に詳しいのではないかと思ったほどだ。市長ほどの方が愛読者でいてくれたことは望外の喜びだった。市長は頭脳明晰であるだけでなく、とても親切な方でもある。その後も新聞に掲載された私の連載記事に対する感想を述べてくれたり、文章のやりとりのなかで私の日本語の誤りをそれとなく指摘してくれたりする。

市長と市役所の方々は、高津柿本神社や和歌を刻んだ石碑が立ち並ぶ万葉公園など人麿ゆかりの場所を案内してくれた。一年越しにやっと訪問することができたとはいえ、まだ母を失った悲しみを背負う私に対する温かい配慮が、何気ない言葉やしぐさから感じられた。美しい町並みを見下ろしながら、人麿は石見の風景を背景に、愛する人々に対する思いを歌にすることを通じて、それまで未開の言語だった日本語の表現力を飛躍的に高めた功労者なのだと語った市長の言葉は忘れられない。

いよいよ益田市を去るとき、駅まで見送りに来てくれた職員の方々は、笑顔のままいつまでも手を振ってくれた。母の死を知らされたあの夜からずっと私を閉じ込めていた氷のかたまりが、その温かさに解けていくのを感じた。昨年急遽帰国の途についたときには薄暗く、重苦しかったあの海も、まばゆいほど夕陽に照らされていた。大切なものを失い、悲しみにくれることはあっても、もう一度立ち直らせてくれる素敵な贈物をくださる天の配剤に、このとき私は気付いた。母の死は一年余りも私を悲嘆の底に突き落としたが、山本市長と益田市の皆さんに出会うことで新しい友情が生まれた。そして、この縁を今度は次なる友情につなげていきたいと考えている。

問 市観光交流課　☎ 31-0331

翻訳家・版画家・詩人
ピーター・J・マクミラン

アイルランド生まれ。アイルランド国立大学ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンを首席で卒業後、同大学院で哲学の修士号、米国で英文学の博士号を取得。プリンストン、コロンビア、オクスフォードの各大学で客員研究員を務める。渡日後は杏林大学教授、東京女子大学講師を歴任。現在は相模女子大学客員教授、東京大学非常勤講師を務める。2008 年に英訳『百人一首』を出版し、日米で翻訳賞を受賞。2016 年に英訳『伊勢物語』、2017 年に英訳『百人一首』の新訳を出版。また、アーティストとして「西斎」名義で版画制作活動を行っている。日本での著書に『日本の古典を英語で読む』『松尾芭蕉を旅する』など多数。朝日新聞で「星の林に」、京都新聞で「古典を楽しむ」を連載中。